

## 「結婚しない」は個人の自由か

教員採用試験をやっても人が集まらない。今年初めての傾向である。人が集まらないわけではないのだが、「実力のある先生」が集まらないのである。これまでは、ある科目について採用試験をやると、いつも三十倍を超える応募者があった。

英語科の場合、私は極めて楽観的に考えていた。試験場で問題を見て、「こんなに易しくは、成績に差が出ないのではないかと心配したりしたが、とんでもない。その易しい問題ができないのである。やむを得ず採用試験を三度行った。その都度新聞広告を出してだから、その経費も馬鹿にならない。結局一人も採用する事ができなかった。

進学校での英語の指導だからと言って、それほど高望みをしたわけではない。しかし、何とか高校生を指導できる程度の力のある人物が見あたらないのである。

### 人口減少が投じる暗い影

私はしみじみ、日本経済が立ち直ってきていることを痛感した。

トヨタ自動車のハイブリットカーは、世界産業で先駆的役割を果たしている。薄型テレビ、様々な録画装置、デジカメ等々、我が国に追随できる国は少ない。経済が活況を呈するわけである。

加えて団塊の世代が、この一、二年のうちに引退する。そのため、新人採用に先手が打たれているのであろう。今や我が国の企業には、それを可能にするだけの余力がある。加工貿易国としての日本を考えると、決して悪い気はしない。

しかし、このような経済的好条件は、この後も永く続くであろうか。

我が国の未来に暗い影を投じる問題は色々あるが、その第一は人口の減少である。

ある統計によれば、二〇〇六年を基準として、二〇五〇年の我が国の人口は、二七〇〇万人減少する。驚くなかれ三七パーセントの減少である。

十五歳から六十四歳までの生産年齢について見ると、三二〇〇万人、三七パーセントが減少する。

少子化に伴う人口減少、特に生産年齢人口の減少は、我が国の将来に暗い影を投げかけている。

### そのうち国も人類も減ぶ

これに対し「安心して子供を産めるような環境を作る事」「育児手当の増額」「ゼロ歳保育施設の充実」等々が叫ばれる。

しかし私は、そのような弥縫（びほう）策は問題の解決につながらず、かえって状況を悪化させる危険があるとさえ考えている。

第一に問題とすべきは、男女ともに結婚を急がなくなった傾向が存在する事である。

私は若い時代、農村の青年団に属して活動していたが、青年団で活動するのは二十歳まで

の女性であった。成人式を過ぎる頃になると、それぞれ家に落ち着いて結婚に準備の入った。結婚しない人は、もしかすると何となく「風圧」を感じていたかも知れない。

このような「前近代的風圧」を全面的に否定する事から戦後は始まった。結婚しようがすまいが、それはあくまでも個人の自由であり、それをとやかく言うのは封建的外圧というものだとするのが、戦後六十年の時代風潮であった。

今や、社会の模範として仰がれる人の中でも、晩婚傾向は著しくなりつつある。なかには結婚せずに生涯を終わる人も少なくない。

間違いなく言える事は、このようにして結婚する人の数が次第に少なくなっていけば、人類は死滅してしまうと言う事である。それでも構わぬと言う人は少なからうが、しかし「人は必ず結婚すべきだ」と言い切ったら、四方八方から石つぶてが飛んでくるであろう。

少子化は国をも人類をも滅ぼすが、このあたりをどのように考えるべきだろうか。

(月刊誌「旬なテーマ」平成18年4月号(中経出版発行) 男の生きる道/女の生きる道掲載)